View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Nara National Research Institute for Cultural Properties Repository

様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　３月３１日現在

機関番号：84604
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2008　～　2010
課題番号：20720217
研究課題名（和文）　古代工房の復原的比較研究-埴輪・須恵器・瓦の工房を中心に-

研究課題名（英文）　The comparative research on ancient workshops of Haniwa, Sueki, Kawara in kofun and Kodai period in Japan.

研究代表者
城倉　正祥（JOKURA MASAYOSHI）
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・研究員
研究者番号：90463447

研究成果の概要（和文）：本研究は「工具痕分析」を武器として、古代手工業生産の工房を具体的に復原し、古墳社会から律令国家に向けての手工業生産組織の存在形態を発展史的に位置付けることを目的とした。古墳時代の関東の埴輪生産、東海の須恵器系埴輪の生産、古代の畿内の瓦生産を主に対象として分析を蓄積した。結果、古墳時代において地域社会に密着して展開していた手工業生産が、律令国家体制の確立以後集約され国家工房を形成していく点が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This research focused on development of ancient handicraft manufacturing from Kofun to Kodai period in Japan. Especially this work analyzed workshops of Haniwa, Sueki, Kawara. Consequently this study made clear that the historical change of ancient workshops. That is, the manufacturing developed in a context of regional society in Kofun period. The other side, the factories evolved under the national control in Kodai period. This historical difference showed the relationships of state evolution and industry in ancient Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学、日本考古学
キーワード：埴輪、須恵器、瓦、手工業生産史

１．研究開始当初の背景

古墳時代を初期の国家段階とみる説は根強くあるが、７世紀における律令国家体制の成立が日本古代国家形成史上、大きな画期となる点もまた多くの研究者が認めるところである。国家形成の画期を何に求めるべきか、それもまた難しい問題であるが、唯物論を引くまでもなく手工業生産の発展過程が重要な要素になる点は疑いない。そういった視点での研究は、主に文献史学のアプローチから

多く示されている。
しかし、実際の手工業生産工房の在り方を復原する際は、考古学の成果によらねばならない。考古学は特に生産遺跡から出土した遺物の分析によって、具体的な生産体制を実証的に復原できるからである。
では、考古学の側から国家形成期の手工業生産を通時的に位置付ける研究が蓄積されているかどうかというと、それぞれの遺物に関して分析は進んでいても、それらの成果を通時的に位置付ける研究は行われていなかった。

２．研究の目的
以上の研究状況を踏まえた上で、本研究では古墳社会から律令国家へと時代が大きく変換する当該期の手工業生産を通時的に位置付けることを目的とした。
考古学は実際に出土した遺物の詳細な分析によって、その生産・使用・廃棄の具体的過程を復原することができる。特に、発掘調査された生産遺跡とその出土遺物に焦点を当てれば、具体的な生産を把握することが可能である。
例えば、古墳時代における須恵器生産遺跡である大阪府陶邑窯跡群の発掘、飛鳥時代の国家工房である飛鳥池遺跡の発掘など多大な成果をあげた生産遺跡の調査事例が知られている。しかし、実際には多くの考古遺物を比較検討するのは不可能なので、本研究では工房復原の分析が進んでいる埴輪・須恵器・瓦を分析対象とする。
この３考古遺物に関して言えば、特に生産遺跡の発掘事例の分析から、工房復原の研究が非常に進んでいる。また、地域にだけ存在した遺物というわけではなく、「中央から地方へ」と拡散した遺物でもあり、中心と周縁の状況の差異からも国家形成期の手工業生産の複雑さを考究できる資料である。
埴輪は古墳時代前期に畿内地方を中心に生産が盛行し、各地に伝播して古墳時代後期に関東で爆発的に生産されるようになった。須恵器も韓半島から導入され、全国に伝播した。瓦も寺院・都城の造営に伴って導入され、地方に伝播したことが知られる。国家成立期の手工業生産の発展を考えるとき、この中央と地方の関係は非常に重要な論点となる。
本研究では、この埴輪・須恵器・瓦の生産遺跡出土遺物に焦点を当て、その工房を実証的に復原し、各工房の歴史的特質や「中心と周縁の差異」を明確化した上で、相互比較することを目的とする。この作業は、文献史学とは異なる角度から、実証的に手工業生産の発展段階を論じる作業に外ならない。発掘された遺跡・遺構・遺物の詳細な分析から積み上げた古代工房の姿を歴史的に位置付けること、本研究の目的はそこあった。

３．研究の方法
具体的な方法としては、埴輪・須恵器・瓦の生産遺跡出土遺物を、特に製作工具の痕跡に注目して分析した。しかし、膨大な作業を必要とする分析のため、個人研究としてすべての遺物に関して等質な作業をこなすのは物理的に限界がある。そのため、本研究では埴輪・須恵器系埴輪の分析に集中して作業を蓄積すると同時に、須恵器・瓦の生産遺跡分析事例に関連する論文・報告書の収集および成果の整理比較を進めた。ここでは埴輪の分析方法について詳述する。
埴輪の表面には調整の際の工具痕跡である「刷毛目（はけめ）」がほぼ必ず存在する。この刷毛目と呼ばれる痕跡が、木材工具の端面を擦過した際に生じる年輪の痕跡である点は 60 年代から明らかになっていたが、その研究が飛躍的に進んだのは 90 年代以降である。同一母材から作られた兄弟工具、あるいは１つの工具からは正逆２種類の刷毛目が現出することが判明し、その同定ができるようになった。このような基礎研究の進展によって、古墳から出土した埴輪の生産地を特定できるようになった。
埴輪の生産地を明確な形で特定し、その工人構成を論じた初めての研究は、千葉県山倉１号墳から出土した埴輪が、直線距離で 80km 離れた埼玉県生出塚遺跡 31 号窯で生産された事実を実証した小橋健司の研究である。この研究は消費地である古墳出土埴輪の生産窯を特定し、その生産の具体像まで復原した点において画期的な研究だった。
本研究の埴輪の分析に関しては、この小橋健司の研究視角を継承しながら、主に北武蔵地域の埴輪窯の分析に焦点を当てた。具体的には、発掘され報告されている生産窯を１つ１つ分析し、刷毛目データベースを構築しながら、その生産の具体像を復原した。さらに刷毛目の同定によって、供給古墳を特定することでその生産・供給の実態を把握した。
以上の埴輪の分析作業は、実は須恵器にも応用が可能である。古墳時代後期の東海を中心に分布する須恵器系埴輪や、埼玉県中の山古墳の須恵質埴輪壺などは、基本的に須恵器の集団が製作した埴輪である。これらの遺物は埴輪の分析と同様、刷毛目の同定によって生産体制を把握することができる。本研究ではこれら須恵器系埴輪の分析も進めた。さらに、７世紀以降の古代瓦について分析事例を集成すると同時に、奈良文化財研究所が所蔵する資料について実見を進め、瓦の生産体制に関する研究成果を整理した。
以上の分析方法によって、埴輪・須恵器・瓦の工房復原事例を蓄積し、最後にそれぞれの工房の特質を把握した上で、それらを比較の視座から通時的に位置付けた。

４．研究成果

以上述べてきた研究目的・研究方法で本研究課題を３年にわたって進めてきた。須恵器・瓦の事例に関しては、総括するまでに至っていないが、北武蔵地域を中心に行った埴輪の分析に関しては、『北武蔵の埴輪生産と埼玉古墳群』（真陽社）と題した 122 頁の科研費報告書を出版して、成果を総括した。ここでは、その報告書の内容を概略して埴輪の分析成果をまとめると共に、須恵器・瓦工房との特質の違いを整理して本研究の成果報告とする。

①北武蔵の埴輪生産とその特質

本研究の埴輪の分析では北武蔵地域に焦点を当てた。北武蔵では古墳時代後期を通じて同じ場所に首長墓が造営された。埼玉古墳群である。基本的には、各地に存在する窯が地域密着型の埴輪生産を展開しながら、首長墓へ大型品を供給していたように、埼玉古墳群を頂点とする階層構造の中で埴輪生産が展開していた点がこの地域の特徴である。

実際の分析では、生出塚埴輪窯・馬室埴輪窯・和名埴輪窯・桜山埴輪窯・姥ヶ沢埴輪窯・権現坂埴輪窯から出土した埴輪を分析した。

まず、関東最大規模の生産窯である生出塚遺跡の分析では 30 基に及ぶ供給古墳を刷毛目の同定から実証した。さらに、北武蔵の生産遺跡は窯相互が物理的に切り合いを持って展開する「八手状」構造であることが知られ、そのため窯の物理的前後関係からⅠ～Ⅲ期編年が確立した。

一方、埼玉古墳群の西側、荒川をはさんだ対岸の比企・大里の丘陵地帯に位置する姥ヶ沢・桜山遺跡の分析も行った。両窯はいずれも近隣の古墳へ埴輪を供給しながら、大型品のみを埼玉古墳群へと供給していた事実が判明した。以上、埼玉古墳群を中心とした北武蔵の埴輪生産遺跡を分析する限り、各窯の歴史的意義が異なっている点が注意される。すなわち、①埼玉古墳群の至近に位置し、埼玉古墳群に中大型品を専属的に供給すると同時に、東京湾まで供給圏を拡大した生出塚窯（拠点生産地）、②荒川西側の丘陵地帯に位置し、基本的には近隣の中小規模墳へ小型品を供給しながら、埼玉古墳群の首長墓の造営に際してのみ大型品を生産して供給した姥ヶ沢窯・権現坂窯・和名窯・桜山窯（衛星生産地）の２者が存在した。古墳時代後期の北武蔵地域においては、「拠点・衛星二重構造型」の生産体制が確立していた。

以上の生産地分析を経た上で、いよいよ各地域窯から埴輪が供給された首長墓：埼玉古墳群から出土した埴輪を分析した。その結果、埼玉古墳群における埴輪の系統を把握することができ、Ⅰ～Ⅳ期編年を確立した。この作業によって、稲荷山古墳→丸墓山古墳→天祥寺裏古墳→二子山古墳→瓦塚古墳→奥の山古墳→愛宕山古墳→将軍山古墳→鉄砲山古墳→中の山古墳という首長墓の変遷が判明した。首長墓から出土した埴輪の生産地をすべて把握し、生産地の窯の物理的前後関係から編年を確立するという手法は今までの研究にない視点であり、動かない編年が確立した。

このように科研報告書で示した北武蔵地域の埴輪生産の研究成果は、今後の埴輪生産研究に大きな影響を与える成果だと考える。この点に関しては、科研の成果をもとにして刊行した著作（城倉正祥 2009『埴輪生産と地域社会』学生社）ですでに論じた点であるが、古墳時代後期の関東地方の埴輪生産は、地域社会に密着する形で展開した点に最大の特徴がある。北武蔵地域の分析事例はまさに埼玉古墳群という地域首長墓を頂点とする階層秩序の中で埴輪生産が展開した点を如実に示している。

以上、本研究の埴輪の分析で、関東の埴輪生産の特質が明らかになった。これを踏まえた上で中心である畿内の埴輪生産を考えてみる。古墳時代後期の畿内の埴輪生産に関しては、継体陵と目される今城塚古墳へも埴輪を供給した新池窯の発掘調査が注目される。新池窯においても、すでに刷毛目の同定で太田茶臼山古墳・総持寺古墳群などへの供給が実証されており、生産の状況が明らかになっている。その成果からすると畿内においても埴輪の供給圏はそれほど大きな範囲ではなく、古墳のプロジェクト規模に応じて複数生産地が営まれた可能性が高い。だとすれば、畿内における埴輪生産の在り方も、規模の違いはあったとしても、北武蔵における生産体制の在り方によく似ていることがわかる。すなわち、畿内地方においても埴輪生産は基本的に地域社会の階層秩序のもとで展開したことが推察される。また、畿内地方の埴輪生産は地方に影響を与えたことは確かであるが、受容の在り方は地域の状況によって多様であった。その点こそが、古墳社会における手工業生産の特質と考えることができる。

②須恵器・瓦の工房とその特質

埴輪工房の復原について、関東地方を中心とした分析成果を示した。次には須恵器・瓦工房との比較に言及する。

須恵器に関しては、まず埼玉中の山古墳に供給された須恵質埴輪壺の生産体制が参考になる。中の山古墳出土の須恵質埴輪壺に関しては、本研究の分析によって埼玉県寄居町の須恵器生産遺跡である末野３号窯で製作された点が、刷毛目の同定から判明した。末野３号窯からは TK209 型式とされる須恵器が出土しており、６世紀末と考えられている。中の山古墳から出土した須恵質埴輪壺の中には、須恵器系の技術で作られたものと埴輪

系の技術で作られたものの２者が存在する。おそらく埴輪の終焉段階に須恵器製作者と埴輪製作者が協業した結果と思われる。埴輪・須恵器製作者相互の距離の近さを思わせる事例である。

一方、東海地方では須恵器の生産者たちが関わった須恵器系埴輪の存在が知られる。須恵器の窯で須恵器と併焼された埴輪である。C 種ヨコハケや倒立技法、環元焔焼成などが特徴とされる。石川県小松市矢田野エジリ古墳出土埴輪の分析事例などが蓄積されるが、個体内工程別分業や種類別分業などの分業体制が認められるなど、埴輪の生産工房よりも体制の効率化・集約化が行われていた点が注目される。しかし、その東海における須恵器系埴輪の展開状況が示すように、その生産はあくまでも地域に密着して展開しており、６世紀における埴輪・須恵器などの手工業が地域密着展開型の生産であった事実が伺われる。

しかし、寺院や都城の造営に伴って列島に導入された瓦生産はその歴史的特質が大きく異なることが知られている。近年では、藤原宮瓦や平城宮瓦が生産地の側から分析されており、その生産体制の在り方が詳細に論じられるようになった。また、上原真人の恭仁宮式瓦の分析が示すように、司工と雇工で構成される生産組織など国家工房としての集中化・均質化が進んでいたことが判明している。このような生産体制は、７世紀における律令体制の確立とともに成立していったものと考えられるが、６世紀における埴輪・須恵器工房とは歴史的な特質に大きな違いがあることがわかる。

③結論

以上、本研究課題で進めた埴輪・須恵器・瓦の各工房の比較作業を通して、古墳社会から律令国家成立にかけての手工業生産の発展段階を部分的ながら把握することができた。

すなわち、古墳時代後期の埴輪・須恵器の工房を見る限り、生産が常に地域に密着して展開している点にその最大の特徴があった。一方で、７世紀以降の瓦生産は集約された国家工房の整備が進み、その地方への波及過程もダイレクトで影響力の強い点が指摘できる。国家段階の進展はまさに手工業生産工房の加速的な変質を促したことが考古学の分析から立証されたことになる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

①城倉正祥、埼玉古墳群の埴輪編年、埼玉県立史跡の博物館紀要、査読無、第５号、2011、57-91
②城倉正祥、生産地分析からみた北武蔵の埴輪生産、考古学研究、査読有、第 57 巻第２号、2010、38-58
③城倉正祥、生出塚窯産円筒埴輪の編年と生産の諸段階、考古学雑誌、査読有、第 94 巻第１号、2010、1-50
④城倉正祥ほか、比企の埴輪、埴輪研究会誌、査読無、第 14 号、2010、53-71
⑤城倉正祥、北武蔵における埴輪生産の定着と展開、古代文化、査読有、第 60 巻第１号、2008、97-107

〔図書〕（計２件）

①城倉正祥、埴輪生産と地域社会、学生社、2009、191 頁
②城倉正祥、北武蔵の埴輪生産と埼玉古墳群（科学研究費補助金成果報告書）、真陽社、2011、122 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

城倉　正祥（JOKURA MASAYOSHI）
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・研究員
研究者番号：90463447

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：